

甲板を埋めたイサダ。浜は活気に包まれた（3月9日、女川魚市場）



重要度増す監事の役割 浜の発展へ改善点助言

「組合は一つのチーム」



総代会で選任された理事の業務執行を監督するのが監事の主な役割。透明性を高めて漁協経営の健全化を図る。浜の持続的発展にとって欠かせない存在だ。当組合では、鈴木政志氏（代表監事、七ヶ浜支所副運営委員長）、鈴木章登氏（監事、唐桑支所運営委員長）、石森裕治氏（同、石巻市東部支所運営委員長）、寺嶋則雄氏（常勤監事、員外）の4人が、本所監査室と連携しながらその重責を担う。

令和2年7月に組合の執行体制を理事会制度に移行。平成19年4月の発足時から続いた経営管理委員会と理事会の二元体制を一元化することで、より漁業者（組合員）に近い立場で業務を執行する責任を明確にした。

常勤監事の寺嶋氏は「（理事は）さまざまな課題に積極的に取り組んでいる。長期的な視点に

監事を務める（左から）石森裕治氏、鈴木政志氏、鈴木章登氏、寺嶋則雄氏

立ち、改革を先送りせず、断行する姿勢を一層求めたい」と述べ、「分かりやすい情報開示が組合員からの信頼につながる。意見を吸い上げていくことも大事」と強調する。

寺嶋氏は元県職員。漁業者ではないが、福祉や財政、産業（農業）振興分野を中心に豊富な実務経験と実績を持つ。組合発展の方策に思案を巡らせ、監事間で意見集約して理事に提言、改善を促す。魅力ある共販体制の構築に加え、ブランド力強化や輸出などを課題に挙げる。

本所を年2回、全34支所・センターを3年の任期の間に1回、業務が適切に行われているかどうかチェックするのも監事の仕事。ルールを守り、汗水流して水揚げに努める組合員の所得向上を目指す。時にはあえて嫌われ役に徹しながら、改善点をアドバイスする。監事たちは「組合は一つのチーム。結束力を高めていきたい」と口をそろえる。

新型コロナウイルス禍の需要低迷や魚価下落、海洋環境の変化に伴う漁獲不振、貝毒の長期化……。取り巻く環境が厳しさを増す中、代表監事の鈴木氏は「組合員一人一人が経営者感覚で頑張ってもらわないと、組合は成り立たなくなる。皆で力を合わせ難局を乗り切りたい。組合長のさらなるリーダーシップ発揮にも期待したい」と語る。

浜に春告げる桜色

出足好調、活用拡大に期待

イサダ魚

今年のイサダ（ツノナシオキアミ）漁は好調なスタートを切り、三陸沿岸に春を告げる鮮やかな桜色が浜を活気づけた。

「東日本大震災前の豊かな海に戻ったかのようだ」。県小型漁船漁業部会おきあみ1そうびき機船船びき網漁業委員会の遠藤仁副委員長（第六十六大國丸Ⅱ当組合寄磯前網支所所屬Ⅱ船主）は久々の好漁に、こう喜ぶ。

今年は県内57隻が操業。3月1日の漁解禁初日から女川、志津川、気仙沼の各魚市場では青空の下、籠いっぱい光り輝くイサダを水揚げする光景が広がった。シーズン序盤は親潮の南下に伴い、群れが濃く、日量400トペース。満船（10ト以上船270隻、同未満船260隻）11隻30トで帰港するケースがほとんどだった。

2年511ト、3年1555トと記録的な不漁に見舞われた。昨年は供給不足から浜値がキロ200円台半ばまで高騰したが、「獲る側から見ても高すぎる値段。需給バランスを保つことが何より大事」と遠藤副委員長。「食物連鎖の末端にいるイサダが増えれば、ほかの水揚げにも好影響を与える」と、県内の漁獲枠を例年より4割少ない9千トに設定するなど持続可能な漁業も推進。「今年のように沿岸域に漁場が形成されると、燃油代の心配などもいらない。資源保護を図りながら、上限の近くまでシー

ズンを通して漁獲が続くのが理想」と強調する。春漁の主役の一つであるイサダ。ふりかけをはじめとする食材のほか、肥満抑制など健康維持に効果のある成分を含むことからサプリメントの原料にも活用されるが、大半は養殖魚や釣りの餌になる。

遠藤副委員長は「フキノトウなどと一緒に水揚げにすると春の訪れを満喫できる。つくだ煮にしてもいい。食卓に上る機会が増えていけば、漁業者もやりがいを感じられるようになる」と、活用の広がりを願う。

組合からのお知らせ

信用共済部

現金自動預払機（ATM）取引限定の定期貯金・定期積金金利上乗せキャンペーンを令和5年3月31日まで実施しています。申込書への記入や印鑑は不要。簡単かつスピーディーに申し込むことができます。

当組合の総合口座通帳とキャッシュカードを持つ個人が対象で、定期貯金・定期積金ともに店頭金利に年0.100%を上乗せします。

定期貯金の預入期間は1年（自動継続）で、1口1万円以上299万円以下。定期積金の契約期間は2年まで、1回（毎月）の掛金（千円以上）は自動振替での払い込みとなります。

1人計31口まで開設可能。通帳とカードを持参し、当組合のATMで手続きをしてくださいます。取り扱い時間は平日午前8時45分～午後7時です。

新型コロナウイルス感染症の影響を受けた漁業者向け「JFマリンバンクコロナ対策長期資金」の受け付けも行っています。所要金額以内（当面2～3カ月の運転資金）で融資を申し込むことができます。

定期の金利上乗せ ATM限定で貯金&積金

金利は年1.3%ですが、県の対策事業などにより令和9年12月31日までは実質金利が0.3%。原則無保証（必要に応じ個別対応）で、融資期間は10年以内（元金据え置き3年以内）です。

金利上乗せキャンペーンも含め、詳しくは最寄りの支所または金融センター窓口までお問い合わせください。

JFみやぎ
ATM限定

定期貯金・定期積金
金利上乗せキャンペーン

店頭金利 + 年0.100%

申込書記入なし
印鑑不要
かんたんスピーディー

JFみやぎの総合口座通帳とキャッシュカードをお持ち頂き
JFみやぎのATMでお取引願います。

ATM定期貯金・定期積金 取扱可能時間 月～金曜日 8:45～19:00

JF マリンバンク 宮城県漁業協同組合

宮城県金庫センター（東仙台支所） 0226-26-4720
石巻金庫センター（石巻支所） 0225-24-1145
青森金庫センター（青森支所） 022-361-9210

協同組合論

北海学園大学経済学部教授

濱田 武士

28

我が国でその名の通りの「漁業協同組合」が誕生したのは昭和8年の漁業法改正以後のことです。それ以前は「漁業組合」でした。「漁業組合」は漁業権免許を受けるための団体であつて経済事業の実施は制度上では認められていませんでした。



「組合支える意識」醸成を

た経済事業をするのかと、漁民は商人に魚を安く買い叩かれ、漁具や燃料を高く売りつけられるという過去の経験があったからです。ただ「漁業組合」は非出資制で、漁民に對しては、大不況でモノが売れず、農山漁村は大変な状況で、農山漁村の事業を拡大した。そのため、政府は協同組合の事業を拡大した。昭和33年から、政府が促進、信用、購買、販売、利用などの事業を一括し、

（宮城県では気仙沼市漁協の前身が産業組合でした。政府は「産業組合」を漁村に広めるのを諦めて、昭和8年に「漁業組合」を出資制の「漁業協同組合」に移行できるようになり、昭和13年の漁業法改正で信用事業も行えるようになりました。その後、指導、信用、購買、販売、利用などの事業を一括し、

「責任」が欠如していたということがよくあります。この「責任」は、決するものであり、事業をつくる主体も利用する主体も組合員であつたはずで、他人が強制できるものでもなく、漁協運営への「参加」により皆で事業を良いものにしていく中で醸成されるものです。醸成には、根拠を必要とします。事業の在り方について役員・組合員との間で常に意見交換をし、事業を時折見直すなどの対応を続けることが必要なのです。



小さな会話から

加藤久美子（かとう・くみこ＝44、気仙沼市）
唐桑支所

日々の仕事の中で、出会った組合員さんに名前を覚えてもらい、呼んでもらえた時は、びっくりしつつもうれしかった事を思い出します。小さな会話をこれからも大切にして、元気よく「あいさつ」を続けていける職員になりたいと思います。



不安に耳傾けて

片倉竜之介（かたくら・りゅうのすけ＝18、石巻市）
石巻地区支所

誰とでもコミュニケーションがとれる職員になりたいです。私は母がおらず父の背中を見て育ちました。相手の辛さや不安に耳を傾けることの大切さは父から学びました。どんなことにも挑める行動力も身に付け、積極的に仕事に励みます。



持てる力尽くす

佐藤弦紀（さとう・げんき＝26、七ヶ浜町）
七ヶ浜水産振興センター

愛する七ヶ浜のため、またそれを支える組合員さんのため持てる力を尽くします。前職で身に付けた接客スキルが自分の武器です。常に笑顔で元気に仕事に励みます。のりを作っている地元の知人にも、恥ずかしくない姿を見せたいです。



積極果敢に挑戦

木村佳朗（きむら・よしあき＝27、石巻市）
表浜支所

気配りが自然にできる職員になりたいです。漁業と密接な環境で育ちました。近所の漁師さんからたくさん差し入れを頂き、食卓には常に海産物が並んでいました。豊かな海を守っていきま。受け身にならず自分から行動していきます。



先頭で引っ張る

山村晃大（やまむら・あきひろ＝20、美里町）
本所総務部総務課

先頭に立って周りを引っ張っていきけるような職員になりたいです。そのためには日々の努力を惜しみません。リーダーシップを発揮できる人材として成長することで組合の発展に貢献していきます。早く仕事を任せてもらえるよう頑張ります。



気配り細やかに

木村晟己（きむら・せな＝18、東松島市）
女川町支所

社会人としての自覚と責任を持って業務に励みます。早く仕事を覚え、組合員さんに信頼される職員になりたいです。事務所の換気だったり、疲れている先輩職員に飲み物を用意してあげたりと細やかな気配りができる人にもなりたいです。

浜の課題を共有

役員と初の懇談会

青年部

当組合の役員と青年部役員による初の懇談会が

頼られる存在へ

砂金青空（いさごそら＝18、山元町）
仙南支所（宣理）



皆さんの役に立てる、頼れる職員になりたいです。聞く前にまず自分で考える癖も付けます。どんな仕事にもてきばきと丁寧に取り組み、時間は掛かるかもしれませんが、掛かるかもしれないところを、分らないところを、どんどん聞いてもらえ存在に成長したいです。



2時間にわたり活発な意見交換が行われた懇談会

換も活発に展開された。青年部事務局の本所指導部指導課係の渡辺未来さんは「最初は互いに緊張気味だったが、すぐに打ち解け、実のある懇談会となった。今後も機会を設けたい」と話す。

亡き仲間へ祈り 震災11年、誓い新た

本所で追悼式



慰霊碑に白菊を手向け
寺沢組合長

日、当組合は石巻市の本所敷地内の慰霊碑前で追悼式を執り行い、犠牲者の冥福を祈った。役員約50人が参列。寺沢春彦組合長らが献花し、地震発生時刻の午後2時46分に合わせ、全員で黙とうをささげた。

慰霊碑は平成24年8月、犠牲になった組合員392人の鎮魂と漁業の再生を願い、全国の漁師らから寄せられた義援金の一部を使って建立した。

寺沢組合長は「なりわいの再生はまだ途上。志半ばで亡くなった仲間の思いを引き継ぎ、これまでつないできたバトンを次の世代にしっかりと届けていきたい」と決意を新たにした。



銀白色に輝くギンザケ（3月14日、女川魚市場）

身質上々で高値発進 水揚げ開始、伊達のぎんも

ギンザケ

県産養殖ギンザケが3月14日、今季初めて水揚げされ、女川魚市場に入荷した。身質の良さとウ



歌津 入札前に品質をチェックする買受人（3月30日）

歯応えシャキッと

ワカメ

高品質で安心、需要拡大

県産養殖ワカメの今季共販入札会が2月17日、気仙沼市の当組合わかめ流通センターで始まった。初入札会で本所わかめ部会の及川文博部長（歌津支所）は「今年も質のいいものができた。シャキシャキした歯応えが自慢。魚と煮付けるとおいしいので、たくさん食べてもらいたい」とPR。高水温の影響で生育が遅れ、生産量の伸びが鈍いが品質は上々だ。

塩蔵品の平均単価（10kg）は前年同期比14%増の1億9435万円。入札は5月10日まで計11回実施される。

ンザケ部会の佐藤正浩部長（志津川支所戸倉出張所）は「餌にバナナポリフェノールや県産の米粉を取り入れるなどさまざまな工夫を施している。刺し身などの生食用としてだけでなく、ドリップが少ないので加工原料にもお薦め」とアピール。



志津川支所戸倉出張所 須藤貴雄さん(44)

北上町十三浜支所 佐藤寛高さん(37)

「ストーリー」のある魚を消費者へ

戸倉で父と共にギンザケ養殖を行っている。高校卒業後、仙台の自動車工場に働いていたが、23歳頃から父の正一さんの仕事を手伝うようになった。特段「継ぐ」という意識もなく、父も特に薦めはしなかったが、「いつの間にかやっていた」という。

「震災前までは、ただ作って売れば良いという感覚だった」と須藤さん。魚を大きくし出荷して、ただそれだけを考えていたが、震災後さまざまな専門家や支援の人たちが来て、あらためて魚が消費者に届くまでのことを意識するようになった。

11月に稚魚が入った作って売れば良いという感覚は、お正月に一日休むのは、ずっと早朝から休みなく働き詰めで、しかしそんな息をつく間もない漁期中でも、生協から会員の見学の依頼が来れば積極的に応じ、どんなふう育てているのかを見せ、消費者の声を聴く機会をつくってきた。それは励みにもなり、また参考になることも多い。

志津川でも輸入サーモンがスーパーの売り場を席巻しがちだが、最近はいオンや生協も積極的に「みやぎサーモン」を取り扱うようになった。地元の人も、新鮮なギンザケを、消費者の皆さんが安心して食べられるように、私が育てています、というように、顔が見える魚を消費者に届けていきたいと胸を張る。時間ができればタイやブリなど他魚種の養殖先進地である四国や九州にも出かけて話を聞いている。

家では3人の娘のよきパパ。仕事が早く終わった日も習い事の送り迎えなどに奔走する。戦国時代などの日本史をたどるのも好きで、時間ができると本を読んだりインターネットで調べたりもする。「よく先人に学べて言いますけど、昔から災害も飢饉も、コロナのような病気も、何度も乗り越えてきたんですよ。ね」と感慨深げに話す。

現在宮城県漁協青年部長であり、20人ほどが在籍する活気ある戸倉の青年部の副部長でもある。「コロナで皆で集まってきたり、相談する機会も減りました」と残念がるが、戸倉では磯焼けの解消にアラメの研究をしているという。「まだ失敗は多い」と言いながら、三陸本来の豊かな海を思い描いて活動が続いている。

手をかけ工夫して最高の品質に

「その年その年で良い悪いはあるけれど、いろいろと工夫してうまくできたときはうれしい」それがワカメの面白いところだと佐藤さんは言う。代々ワカメを作っている家系で、高校卒業後間もなく家業を手伝って今に至る。小さな頃から祖母や両親の姿を見てきたので、自然な流れでワカメ作りをするようになったという。今の時期は両親と妻と共に製品作りに忙しい。

十三浜のワカメは、北上川が運ぶたつぷりの栄養、荒波にもまれる外洋に気配り、山に降った雨に数日後に海に届くことと計算して行動しなくはないという。近年は低気圧も大きく発達することが多く、被害に遭わないよう石を重くしたり水深を深めたり。自然を頼んでの工夫は経験も必要で手間がかかるが、そうしていいワカメが収穫できたときの喜びはひとしおだと話す。「めかぶも甘く、味には自信があります」と胸を張る。

かつて比べれば浜に人がいなくなり、陸作業の人手不足も顕著になっている。温暖化によりブス（穴開き）が出たり、刈り取りを早めざるを得なかったりと、どの海にも共通の課題はいろいろあるが、十三浜には震災後も頑張っている漁家も多い。佐藤さんは支所の青年部の前役員でもあり、現在も部員として活動している。青年部では、ワカメの種苗の安定確保のために、かなり以前に使われていたという地種を復活させようと試行錯誤している。地種を作っている他の浜に視察に行ったり、水産技術総合センタールと協力したりして活動して4年。「完璧には成功していないけれど、今年もいくらか種付けができた。もうちょっと早い

種を作りたいということ、来年が勝負でしようかね」とチャレンジは続く。

品質には自信があるが、「十三浜のワカメの、全国的な認知度が自分にはよくわからない。皆に知ってもらえるようになるといいですね」と佐藤さん。ワカメのシーズン以外はコンブや定置網にも着業している。「コンブもおいしいですよ」と柔和な笑顔を見せる。

3人の子どもの父。休日には今年高校に入った長男の野球を観戦するなど、家族と過ごす時間を大切にしている。「成長が楽しみ」と頼もしい父親の顔で話してくれた。



経済事業部 安定した収入・流通をリード

販売業務、購買業務、そして流通推進業務を担当している。

販売・購買のまとめ役

販売課では、組合員の皆さんが生産された水産物の共同販売(共販)に關連する業務と品質問題などの衛生対策関連業務の大きく二つの業務を行っている。気仙沼(北部)・



高橋 一実部長



小野寺 賢次長代理

石巻(中部)・塩釜(南部)各総合支所間の司令塔となり、総合的な調和を図り総合支所を通じて支所との連携をとる。安定した漁家経営のためにあらゆる手段を駆使して販売対策を講じることが販売課の大きな役割だ、この4月に部長に就いた高橋一実さんは話す。

生産者を意識した流通

流通推進課では、水産物加工品を買い取り、量販店やゆうパックなどと連携して販売する収益追求型の業務を行う。組合員の皆さんが生産した水産物の全国的なPRや販売促進の効果が期待できる仕事を行っている。加工業者やバイヤーとつながりのある仕事で、組合員の皆さんとは一番距離がある。しかし、昨年度1年間流通推進課の課長を兼務してきた高橋部長は、この距離をなんとか埋めたいと考えてきた。

作っている人の気持ちを感じ、生産原価がいくらかかっているかまで職員皆に意識してほしいと話す。「作る人がいい」と話す。販売することができないというのを忘れないといけない。生産のプロセスが理解できていないと安易に値段は付けられない。コロナ禍もあり、思うようにはできなかったが、何回か浜に出向いて生産者の皆さんと会話する環境を意識して設けてきた。

安定した経済基盤を

「今後国内だけにとらわれない販売を考えていかなければならない」「つまり輸出を考えていかなければならない」と高橋部長は話す。その結果、安定した生産ができるような国内相場を形成できたらなおさらいいですね。今まで違った販売手法を加えることで、品質を向上する動きが出たり、買付意欲が掻き立てられたり、そんな期待も込め流通価格の底上げを狙っていききたいという。

併せて、「共販という柱をもっと太く」というのも目標だ。共販という大きな収入の柱があればこそ、多様な販売を試してみることができる。強制的に全部共販という考えではなく、自由に選択できるが、共販の柱を太く信頼されれば自ずと物が集まってくるようにしていきたいという。

SS

販売課、購買課、流通推進課の3つの課からなり、職員は17人。令和2年度の総取扱金額は225億9500万円。

SS

県主催のブルーカーボンシンポジウムが3月23日、仙台市内で開催された。地球温暖化の原因となる二酸化炭素(CO₂)の吸収源として注目される、海藻や藻類などのブルーカーボンを増やし、豊かな海の生態系を育む藻場を広げるのが狙い。オンラインを含め約70人が参加した。

藻場再生で脱炭素ブルーカーボン活用推進へ

仙台市でシンポ

で、コンブやホンダワラ、アラメなどが森林より多くのCO₂を吸収するとの研究報告があり、活用を促す動きが世界各地で活発化している。

基調講演で国立研究開発法人水産研究・教育機構の堀正和氏は、沿岸域の藻場や、熱帯・亜熱帯で生息するマングローブ林がCO₂を吸収した後、地中の枝や葉、根で長期貯留する機能があることを報告。藻場が回復すると小魚など沿岸の生き物も集まることから「ブルーカーボンの考えが広まれば、生態系の保全にとっても大きなプラスとなる」と指摘した。藻場再生によってできるCO₂吸収枠を専門機関が認証し、企業に販売する制度「Jブルークレジット」も紹介した。

本所を訪ねて



鹿又哲夫統括部長



井上英明次長

必要な融資を的確に

信用事業と共済事業を担う。信用事業では農林中央金庫、全漁連、宮城県庁、沿岸市町などと連携し、融資業務と貯金業務において、窓口があり各支所をとりまとめている気仙沼(北部)・石巻(中部)・塩釜(南部)の各金融センターをさらにとりまとめている。

資金面で支え万が一に備える

信用共済部

融資の審査、固定化債権の回収、公庫資金の取扱いなどのほか、災害時などは新しい融資の資金を計画し、担当部門の各金融センターが対応している。例えば新型コロナウイルス感染症の影響を受けた漁業者等に対しては、コロナ対策資金を用意し、2020年2月から22年2月まで延べ123件、6億4300万円

の融資を行ってきた。「現在の漁家経営は、2つの面で厳しい状態にあります」と鹿又統括部長は話す。ひとつは温暖化で今まで獲れていた魚が獲れなくなったこと、養殖も温暖化のために漁期が短くなって生産量がその分減っている。もうひとつはコロナ禍に伴い単価が下がっていること。「こういう厳しいときのために信用共済部はあると私たちは思っています。漁家は自分たちの努力だけではどうしようもない部分がある。必要な資金が必要な時に融資するのが私たちの役割です」。既往の融資についても、個別に様子を見ながら返済の条件変更な

どの対応を行っている。もちろん通常の設備投資にも、個々の状況に応じてきめ細かに資金面でサポートしている。

「状況に応じ、しっかりと組合員さんに寄り添った形で資金面からサポートしていくのが私たちの一丁目一番地」と鹿又統括部長。「私たちはいつも組合員さんのために少しでも力になることを考えていますので、何かご相談があればぜひ声をかけていただきたい。しっかりと相談に乗っていきます」と井上英明次長も話す。

貯金も利便性アップ

貯金に関しては、昨年11月からATM定期を推

進し、キャンペーンを行っている(詳細は1面)。定期貯金であってもATMを利用できるため、時間の制限を受けがちな組合員にも利用しやすいものになった。

生活の不安に寄り添う

共済事業は、共水連や支所と連携しながら管理・推進を行っている。普通厚生共済の「チヨコ」はもちろん、介護の不安に備える「あしす」と、さらに三大疾病の保障を加えた「あしすぷらす」を新商品として加え、好評を得ている。貯蓄をしな

SS

融資審査課、金融課、共済課の3つの課からなり、職員は16人。令和2年度の貸出金120億8217万円、貯金合計金額706億6770万円。長期共済保有高は計533億3500万円、短期共済保有高は計458億円。



ブルーカーボンに理解を深めたシンポジウム

パネルディスカッションでは当組合網地島支所嘱託職員の阿部敏和前支所長がパネリストとして登壇。県や当組合などで組織する県ブルーカーボン協議会のモデル地区に選ばれ、3月下旬から支所管内で取り組むアラメ藻場造成に向け「東日本大震災後、藻場の消失が一気に進んだ(アラメの)人工採苗は順調で、磯場にいかにか定着させるかが課題。アラメの漁獲減少やウニの身入り低下が深刻化しており、磯焼け対策にもつなげたい」と意気込みを示した。